

雨嫌いのひとり言



入来院 久子

東京は梅雨が明けたとニュースで知った。雨が嫌いなのは東京が羨ましい。鹿児島はまだグズグズと雨が降る天気予報だ。しかも昨年より23日も早い梅雨入りだったそうだから嫌になる。実は、私が東京から実家に戻ったのは昨年の十二月半ばだ。だからもうすでに鹿児島での生活は（現在六月三十日）半年が過ぎたことになるが鹿児島で迎える初めての梅雨だ。鹿児島の雨量はたぶん東京の比ではないだろうと用心はしているのだが、さて今年の梅雨はどれだけ降るのだろうか。

雨が嫌いな理由は20年ほど前、当時住んでいた香川で珍しく降った大雨の晩に交通事故

に遭って死にかけてからだ。対向車が豪雨の中突っ込んできて、正面からぶつけられた車はもちろん廃車。私は肺挫傷と胸骨骨折で救急車に運ばれ大学の付属病院の集中治療室行きとなった。次男の剣道の練習の送迎時のこととで、助手席の次男は奇跡的にシートベルトの青痣だけですんだのだが、運転していた私は当時エアバッグの無い軽自動車だったので、ハンドルに胸を強打しての大怪我だった。

晩の事故だったのだがその夜中に鹿児島の実家に姑が電話して母の貞子が翌朝一番の飛行機で香川の治療室まで駆け付けてくれた。翌日から夫は中学校の教諭、姑は舅と自営の電気店で自分の仕事を普段通りにこなしていたため、病院にはほとんど来なかった。一週間ほど集中治療室で付き添ってくれた母だった。

事故直後病院に駆け付けた姑は私が集中

治療室のベッドであえいでいる際「肺がつぶれていて専門医が不在のためレントゲン写真だけではよく分からないが、肺にもし穴が開いていたら今夜危ない。」と医師から告げられたにもかかわらず、看護師に「ここは完全看護でしょ？ 何かあったら連絡してください。明日仕事があるから帰りましょう。」と夫と息子たちを促したのだ。信じられないことに夫はそれに従って、肺がつぶれて息がなかなか出来ずに苦しむ私を残してその晩さっさと家族を連れて家に帰ってしまった。実はベッドで酸素マスクを付けられていた私は怪我の痛みで気を失うことなく、姑や夫の会話をしっかり耳にしていた。たぶん、姑たちは私の意識が無いと高をくくくつての言動だったのだろう。

もし肺に穴が空いていたら私は死ぬのに、死んだ後に病院へ駆け付けるつもりなのかと

私は悶えながら夫に聞いたかった。しかしながら苦しくて言葉にならなかったのだ。鹿兒島の母には「娘さんが危篤なので早く来てー」と真夜中に電話しながら、私に付き添うことなく帰宅してしまった姑や夫。それでも私はその事実を知っていたことを十年以上、家族に黙っていた。ただひたすらずっと、ずっと心の奥で夫と姑を許せずにそれからの時間を過ごしていたのだ。

そうそう、私のことを母に”娘さん“と言ったが、姑は漢字こそ違うが読み方は私と同じヒサコという名前。だから嫌だったのか、嫁に来た私を一度も「久子さん」とは呼ばなかったし、それは夫も同じで私が子供を産んで母になる以前まで私は姑や夫から「ちよつとアンタ」や「おい！」と呼ばれていた。母親になってからは本意ながらも彼らからは「お母さん」と私は呼ばれたのだ。

一事が万事で、その他にも様々に心傷つくことが多々あり、その都度耐えに耐えてきたのだが、積もり積もって限界が来て、一昨年私は思い切って独り身となり旧姓の入院院に戻った。そして香川から古巣の東京に帰り、大学時代の友達や後輩のサポートで私は東京で仕事をする事ができたのだ。

それにしても香川での交通事故後、肺や胸の骨が完治しても一年間むち打ち症に苦しんだ私は、未だに雨が降る前に頭痛と肩こりが酷くなる。天気予報を聞かなくても翌日の雨が分かるほどだ。だから雨は大嫌い。

その雨嫌いな私が僅か一年足らずの東京生活で鹿児島の実家に戻った理由は、父の車の運転が心配になったからだ。昨年母の七回忌で五月に帰省した際とお盆に帰省した際、父の車は普通車のセダンからオンボロ軽自動車に変わっていて、しかも軽自動車の車

体にかなり大きな接触事故の傷があったのだ。父に尋ねれば、セダンは車庫からバックで出す際に納屋に激突して廃車になり、安い軽自動車を買ったのだが、車体の傷は知らないうちに誰かにつけられたと言ひ張るだけだった。心配になった私は止むを得ず東京での仕事を辞め、南阿佐ヶ谷のマンションを引き払って鹿児島の実家に移り、今は要支援2の判定を受けた父の面倒をみている。

今となっては意地の悪い姑や情けない夫と別れて清々しているし、父のためにもいい結論だったと思う。でも、許されるなら久しぶりに再会した幼馴染たちや兄妹たちと楽しく大好きな東京でもうしばらく過ごしたかったのが本音だ。米寿くらいまで父は元気でいてくれるかなと希望を持っていたのだが、仕方ない。これも私の運命なのだろう。

母に俳句の手ほどきを受けたという私よ

り一回りほど年上のご近所の奥様が、私をなぜかひどく気に入ってくださって、最近毎日、様々な食物や品物を手にして我が家を訪れる。

朝7時だろうが晩の8時だろうが、雨が降ろうがやってくる。ひどい時は一日二度もやってくるので、いくら愛想のいい私でも相手をするのに閉口してしまふ。田舎はアポイント無しで家を訪問するのが当たり前なのかもしれないが、日曜の朝8時に「久子さんいる？」と玄関でする声に私はため息が出る。

雨は嫌いだし、雨に負けずにやってくる。当然のように家に上がり込む厚かましい人間も大嫌いだ。でも、人生の先輩である方に、なかなか直接文句を言えないでいる私。

梅雨が明けたら嬉しいし、このご婦人の一方的な突然訪問が無くなれば尚嬉しいと思う。今日この頃。この拙い文章が「炬ばたセイ談」に掲載されるとしたら、その頃はとっくに鹿

児島の梅雨は明けているわけだが、梅雨と共に私の憂鬱がすべて吹き飛んでいることに願っている。

